

洗礼式と髪飾り

香月美夜

洗礼式と髪飾り

洗礼式はその季節で七歳になる子供達とその家族が神殿へ行つて市民登録をするための神事です。市民登録をしなければ見習い仕事にも就けないので、子供にとってはとても大事な行事といえるでしょう。わたくしは六歳で冬に洗礼式なので、まだ神殿へ行ったことはありません。我が家は神殿の入り口に最も近い場所にあるオトマル商会というお店ですが、いくら近くに神殿があっても中に入るのは洗礼式を終えた者だけだと決まっています。大きな門の奥にある神殿の中は非常に気になりますし、見習い仕事にも就けるようになるので洗礼式を迎えるのが今から楽しみです。

……だって、お仕事ができるようになる、皆が忙しい中、一人だけ家で留守番をすることがなくなるでしよう？

オトマル商会は神殿前にあるため、洗礼式や成人式などの神事が行われる日はお客様が増えます。子供達の行進がある時間帯は近所やお付き合ひのあるお店の方々とご挨拶をしたり、洗礼式の子がいればお祝いをしたりします。そして、洗礼式の後にはお客様が事前にご注文くださった物を取りに来られるため、お店の中が非常に混雑するのです。

お父様も、お母様も、見習い仕事をしているお兄様達も店番をしたり、店の前に出て近所の子供のお祝いをしたりと大忙しです。けれど、わたくしはまだ洗礼式を終えていないのでお店に出てお手伝いをすることはできません。

⋮
早はや

今日の洗礼式

あら？　ネーエの息子むすこ

とコルデ水を^{すい}

「ユツテ、
蜂蜜はちみつ

嬢様

フリーダは今日の行列きょうぎょうれつ

たいちょう
体調になつて

でも、
外^{そと}

まゐられてよく見_み

…おまけに

た^{かた}方^が参^{さん}加^かし

「お部屋の窓から見下ろしていた時の方がよく見えたので、今日はお部屋から見ます」

「ふむ。ならば、フリーダはわしの部屋に来るか？ 今日店の売り上げの確認をして、午後からギルドに行くつもりなのだが……わしの手伝いをしながら行列を待って、一緒に見るのはどうだ？」

商業ギルドのギルド長であるおじい様がわたくしを誘ってくださいました。三階にあるわたくしのお部屋より二階にあるおじい様のお部屋の方が洗礼式の行列をよく見ることができるとし、自室で一人待つ

寂しさはなくなるでしょう。

「おじい様とご一緒にします。ユツテ、お花の準備はおじい様のお部屋にお願いね」

ユツテにそう頼んで、わたくしは朝食を終えました。

「ねえ、ユツテ。家の窓から花弁を撒くだけなのに、そこまで髪型や衣装に凝らなくても良いでしょう？」

「いいえ、お嬢様。窓から皆に見えるのですから、きちんと整えなければオトマール商会の品位にもか

かわります」

朝食の後、ユツテは熱心に衣装を選んだり、わたくしの髪を結ったりしていますが、わたくしは早く

おじい様のお部屋に行きたいのです。

「ユツテには花弁の準備をお願いしたはずよ」

「籠を移動するだけですから、お嬢様がお手伝いをしている間にできますよ」

ユツテが整え終わるまで待って、ようやくおじい様のお部屋に向かいました。おじい様は側仕えのコ

ージモと二人で、オトマール商会の収益の確認作業をしています。

「おじい様、お手伝いに参りました」

「ああ。では、こちらを数えてくれるか、フリーダ？」

「お任せくださいませ」

おじい様からジャラリと重たい革袋を渡され、わたくしはうつとりしながら受け取ります。そして、おじい様の傍らで革袋から金貨を取り出して数え始めました。窓から差し込んでくる日の光に小さな金貨がキラリと輝き、チャリンチャリンと澄んだ音が響きます。わたくしは金貨ほど美しい物は他にないと思うのです。

わたくしがお手伝いを始めると、ユツテはすぐに身を翻し、花卉の準備を始めました。

「お嬢様、そろそろ行列が動き始めたようですよ。遠くから歓声が聞こえ始めました」

窓から様子を見ていたユツテの声に、お手伝いを切り上げて立ち上がります。窓辺には洗礼式の行列に向けて撒くための花卉がたくさん準備されていました。おじい様と二人で撒くには多すぎるくらいです。

「今日の洗礼式におじい様のお知り合いの方はいるのですか？」

「ギルドの関係者には何人かいるが、それほど親しくはない者ばかりだからな」

わたくしはおじい様と一緒に大通りに面した窓から下の大通りを見下ろしました。ちらほらと洗礼式の格好をした子供達を通りの前に出て、周囲の人達に祝ってもらっている様子が見えます。白を基調とした衣装の裾に刺繍がされ、綺麗に結った女の子の髪には夏の花が飾られています。

「冬にはフリーダが主役だな。準備は始めているのか？」

「ええ、おじい様。冬の間、布の準備は終わりましたし、春の初めに毛皮も買い込みました。お母様やユツテが刺繍を始めているわ。でも、冬の洗礼式は花がないから、あの子のように華やかな感じにはな

らないでしようね」

「それはどうしようもないな」

冬の洗礼式の頃にはもう髪に飾れるような花はありません。それがひどく残念です。

「いくらお金があっても季節の移り変わりは変えられませんし、わたくしの生まれた季節を変えることもできませんものね」

おじい様とそんな話をしながら大通りを見下ろしていると、洗礼式の行列がやってきました。白い晴れ着を着た子供達の集団がこちらへ近付いてきます。見物をしている周囲の大人達が声を上げ、お祝いの言葉をかけているのがわかりました。

「洗礼式、おめでとう！」

「エーレンフェストの新しい仲間祝福を」

行列の先頭に加わっていく子供達のために、わたくしは籠の花弁を手にとって「おめでとう」と言いながら窓から撒きました。白が多めではありますけれど、色とりどりの花弁が雪のようにひらひらくるくと回りながら降り注いでいきます。夏の明るい日差しの中に花弁が光って見えるようです。

「ユツテ、わしの分も撒いてくれ」

おじい様は籠をユツテに渡すと、少し身を乗り出すようにして行列を見下ろします。子供達のまわっている衣装の質から今日のお客様がどのくらいいるのか予想するのでしよう。

そんなおじい様の様子を横目で見つつ、わたくしはユツテと二人でお祝いの言葉をかけながら花弁を降らせていきました。花弁の祝福を受けた子供達が上を向いて、「ありがとう」と大きく手を振っているのが見えます。何だか嬉しくなつて、わたくしはどんどん花弁を振り撒きます。

「……あら？」

洗礼式の行列の中でも後ろの方に一人、目を引く女の子がいました。周囲の子供に比べて髪がとても綺麗なのです。あまり手入れができない貧民らしいボサボサでバサバサとした髪の子供達と違って、彼女の青緑の髪には不思議なくらいに艶があり、夏の日差しにキラキラと輝いて見えました。歩く動きや風に合わせて揺れる髪はふわふわサラサラという感じでした。

「変ね」

街の南の方からやって来る者達は中央広場で一度集まって並び直して神殿へ歩くため、行列の後ろの方にいるのは街の南側に住んでいる貧しい者達のはずです。けれど、その子だけは明らかに違って見えます。「……並ぶ場所を間違えた富豪の子供かしら？」

けれど、間違えているようには見えませんでした。貧しそうな周囲の子供達と笑顔で楽しそうに話をしています。彼女は周囲の子供達と知り合いで間違いないようです。

「どうした、フリーダ？」

「髪の艶も衣装の刺繍も素晴らしくて貧民には見えない子が行列の後ろの方にいるのです。あの青緑の髪の……」

わたくしがどんどんと近付いてくる女の子を指差すと、おじ様とユツテは彼女に目を向けました。

「ふむ。身綺麗にできる子供があのような位置にいるのは珍しいな。刺繍もずいぶん凝っている」

「周りの子達と違ってとても複雑に髪を結っていますね。どのように結うのか、お嬢様の洗礼式までにわかればよいのですけれど」

指差すだけで二人がすぐに気付くくらいに周囲と違うのです。それぞれの感想を聞きながら、わたく

しは何となく目を引かれて、その女の子をずっと見ていました。ゆるく波打つ青緑の髪がふわふわと揺れて真下を歩き、わたくしの窓の前を通り過ぎていきます。彼女の後頭部が見えた時、わたくしは思わず「まあ！」と驚きの声を上げました。

……作り物のお花!?
摘み取られた夏の花で髪を飾る子供達の中で、一人だけ今まで見たことがないような作り物の花の飾りをつけているのです。

「フリーダ？」

「おじい様、ユツテ。先程の髪の綺麗なあの子を見て。あれは作られたお花の飾りじゃないかしら？」
わたくしが指差すと、二人は窓から大きく身を乗り出して神殿の門へ近付いていく彼女を見つめて目を凝らしました。

「あのような花はないからな。作り物であろう」
作り物の花であれば、わたくしの洗礼式でも花を飾ることができでしょう。

「……おじい様、わたくし、あのお花の髪飾りが欲しいです。あれがあればわたくしも洗礼式でお花の飾りを付けられるでしょう？ この店で取り扱っているのかしら？」

わたくしがそう言うと、神殿へ入っていく彼女の後姿をじっと見つめながらおじい様がゆつくりと唇の端を上げました。

「ふうむ、探してみよう。この街で商っている物ならば、すぐに情報は得られるはずだ」

おわり